

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

篠原 健介

主論文の題目
および
掲載誌・審査委員

題目 Response of Salivary Stress Markers in Conscious and Unconscious Patients with Acute Ischemic Stroke

（急性期脳梗塞患者の意識状態による唾液ストレスマーカーの応答）

掲載誌 Journal of St. Marianna University 2016; 7: 53-63

主査 北岡 康史

副査 信岡 祐彦

副査 鈴木 真奈絵

[論文の要旨・価値] 様々な負荷に対するストレス応答の指標として唾液中のストレスマーカー測定が利用されつつある。脳卒中患者は、突然生じた神経脱落症状や安静臥床の強制などで、強い身体的、精神的ストレスを受けていると考えられる。本研究では急性期脳梗塞患者における唾液中ストレスマーカーと、身体活動度、意識障害の程度、梗塞体積との関係を明らかにすることを目的としている。対象は、発症後 24 時間以内の急性期脳梗塞症例で、20 歳から 90 歳までの患者を前向きに登録した。唾液採取は正常対照群 11 例、患者群は発症後 24 時間、4 日、7 日の 3 回、いずれも午後 2 時から 5 時の間で採取、分泌型 IgA、アミラーゼ、dehydroepiandrosterone (DHEA)、コルチゾールの測定を ELISA 法で行った。27 例 (67.7±12.9 歳) の患者に登録し、意識清明が 20 例、そうでないものが 7 例であった。発症後 24 時間以内での IgA とコルチゾールの値は正常対照群より有意に高値であったが、アミラーゼと DHEA に上昇は見られなかった。IgA は身体活動度、NIHSS スコア、梗塞体積と有意に相関し、コルチゾールは身体活動度のみと相関した。IgA とコルチゾールは意識障害の有無別に、年齢、身体活動度、NIHSS スコア、梗塞体積との重回帰分析を行い、意識清明患者の IgA と身体活動度で有意な関連が見られた。唾液中 IgA 量を脳梗塞患者で検討したのは本研究が最初であり、特に身体活動度との有意な関連を見出したことは、今後唾液中 IgA 量が脳梗塞後のストレスマーカーとして有用になる可能性を示し、価値ある研究と考えられた。

[審査概要] 学位審査は平成 29 年 1 月 26 日、数名の陪席者のもとに行われた。約 20 分間のプレゼンテーションでは脳梗塞急性期での免疫応答の経路を分かりやすく説明し、Stroke-induced Immunodeficiency Syndrome についても解説があった。約 40 分間の質疑応答ではなぜ唾液中アミラーゼが上昇しなかったのか、免疫機能が下がる方向に向かうのに唾液中 IgA はなぜ上がるのか、器質的ストレスと精神的ストレスを両方見ているのかなど、質問は多岐にわたったが、申請者はおおむね的確に回答した。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 申請者は当該研究領域における知識は豊富で、研究発表能力、研究意欲も高いと判断された。質疑応答では真摯に対応し、誠実な人柄がうかがえた。英語の試験は、引用文献の discussion の一部をその場で和訳してもらい、十分な英語読解力があると判断できた。総合的に学位授与に値すると判断された。